

令和6年度 第2回大東市産業振興市民会議（報告）

1. 日時・場所 令和6年10月29日（火）午後3時00分～5時20分
大東市役所 厚生棟2階B会議室

2. 出欠（敬称略）

【出席】

大阪産業大学 社会連携・研究推進センター長 国際学部国際学科 教授	中山 英治
大阪公立大学 商学部 教授	本多 哲夫
(株)山田製作所 代表取締役	山田 茂
新大阪食品産業(株) 代表取締役	北尻 正太
NPO法人住まいみまもりたい 理事長	吉村 悦子
NPO法人大東夢づくりコミュニティ 代表理事	中村 朋子
小金屋食品(株) 代表取締役	吉田 恵美子
アッセンブル産業(株) 代表取締役	竹原 清司
大東商工会議所 常議員 (株)ウチダ 代表取締役	内田 祥嗣

大東市 産業・文化部長 中村 敬治
事務局 産業経済室 椎葉課長・林上席主査・田上（文責）

【欠席】

明星シンセティック(株) 代表取締役	上田 隆章
大東市商業連合会 会長 JILLS	角谷 昌寛
近畿経済産業局 総務企画部中小企業政策調査課長	近藤 健一郎

3. 山田会長あいさつ

船井電機の倒産による従業員の解雇について、大東市の経営者としてどう責任を果たしていくか考えている。各委員にもハローワークや商工会議所から従業員の雇用について募集案内が来ていると思うので是非とも受け皿になってほしい。また当社の山田製作所では先週まで交野支援学校である四條畷校の生徒が就業体験に来ていた。夏にも一度来ており、今回は二回目となる。二回目を開催した背景にはその生徒を当社で雇用する上で、子供が当社でやっていけるかという家族の不安を払拭するために行われた。障害者雇用はボランティアではなく、労働力として迎えるため行っている。障害者雇用を行っている会社は誰にとっても働きやすい環境にあるはずである。当社がそのような働きやすい会社になってほしいためにも今後も障害者雇用は実施していきたい。

4. 大東市産業振興市民会議概要説明

事務局より資料1～資料6について説明。

5. スローガンに基づく各委員からの意見

>山田会長より

本会議における産業振興の考え方とスローガン、スローガンに基づく4つの方針について改めて説明し、資料3の具体的内容を含む各委員からの意見を求める。

>「輝く未来に」という言葉からも若い世代の人材確保について考えたい。ここ数年、中小企業は採用が難しい状況にある。また新規採用した人が半年以内に離職することもよく聞く。企業側と学生側の働くイメージなどを一致させるための支援や企業同士や企業と学校との協力体制が大東市として必要ではないか。

>大学卒業後の大企業志向は根強い。当校でも経営者の方からの講義を通じて中小企業の実態や魅力は伝えており、学生たちも中小企業の重要性は理解している。しかし未だに大企業志向が強く、実際に中小企業に就職している人はかなり少ない。大学に入る前、小学生の時などから地元の中小企業に馴染みを持ってもらうことが必要である。ただ就活時に企業を調べる機会が初めて生まれる学生において、みんなが知っている企業に入りたいという人の気持ちはわかる。中小企業への就職を促すことも大切だが、大企業に入ったのち、転職の選択肢として地元の中小企業選んでおられるようにしておくことも重要だと考える。そのため中小企業を転職の選択肢として考えられるようなプロモーションなどは必要であると考えており、そういう材料を提供していきたい。

>当校では大企業志向はそこまで強くはないと感じる。当校はキャリアセンターが充実しており就職率は高い。ただそのキャリアセンターでは自信がないと感じる学生の意見をよく聞く。それは成功体験の少なさに起因しており、学力やプライベートでも自分の思うところまで届かなかったと感じる学生が多いからではないかと感じている。何か小さなものでもいいので成功体験を与えることや、自身ができることを教員から提示することが今の教育には必要だと感じる。また学生の可能性をどのように見ていけばいいのかが重要であり、その見方や考え方が若手育成にもつながると考えている。出来ることは多いのに、学生は小さい選択肢を見てしまうことが多いのでその選択肢や可能性を広げられるような取組をしていきたい。

>委員質問

インターンシップなどをしている学生はいないのですか？

>委員回答

二極化の状態にある、実際にインターンシップに関する制度は整っている。しかし自主的に情報を仕入れる学生は積極的に参加しているが、そうではない学生も一定数存在する。学校側としても自主的に動いていない学生に対してどう情報を発信し、インターンシップなどに参加させるかが難しい問題である。

>企業側からの情報発信も必要である。また成功体験に関しては、インターンシップで実際に企業がど

のような事業をしているか知ってもらう機会を通じた取組が重要だと感じる。

> 今回の内容を本校のキャリアセンターに共有し、地元企業との取組に関する可能性の広さについて伝えていきたい。

> 委員質問

大学としてボランティアなどの案内はないのですか？

> 委員回答

ボランティアの数は多くないです。

> 大東市の生活サポート事業を行う中でボランティアの学生とかかわる機会が多い。その中でボランティアについてエントリーシートに書くことで内定を多く得ている学生もいる。

> 当校では阪奈病院での介護活動と教育実習が学外での主な取組となっている。私もボランティア活動の可能性は大きいと感じている。私の専門でもある外国人の支援に関していえば、語学のサポートだけではなく身近な生活のサポートを通じて成功体験を得ることもできていると考えている。

> 当社でも阪南大学の学生がインターンシップに参加している。その中で感じるのは奨学金の負担の大きさである。現在日本では二人に一人が奨学金を借りている状態である。日々の生活費を必死になってアルバイトで稼いでいる学生もいる。そんな中、ワーキンググループでも話のあったアルバイト型インターンシップは必要であると感じる。

> 事務局の林意見

生活の苦しさからアルバイトにかけける時間が長く、学業がおろそかになってしまう学生も多い。また無償インターンシップに魅力を感じない学生は多い。怪しいバイトも増えている中、校長先生としては安心して紹介することが出来て、また地元企業を働く選択肢として考えることもできることから地元企業の有償インターンシップが必要であると考えている。

> ブランドの観点からいくと、東大阪は「中小企業の街」から「モノづくりの街」と言葉を変えるだけでイメージが変わった。やはり言葉の響きは大事だと感じる。本会議のスローガンの情報発信を徹底する必要がある。例えば中小企業が「このスローガンに同意しています」とHPに書くだけでも効果が違う。また大東市は教育が弱い側面がある、良い高校や大学などがあれば親も安心して通わせる事が出来て、人口が増えるので教育は大切であると考えている。

> 中身より人に言えるかどうかで就職先や居住地を決める人は多い。大東市のメリットが見える化することによって大東市や大東市内の企業に来る人を増やすことが出来るのではないかと。また中小企業で働くメリットの見せ方を考えていきたい。大東市は目立つことが少ないが、住みやすいと思っている人

は多く魅力もあるので見せ方を大切にしたい。

> 中小企業で働くメリットは働き甲斐だと考えている。お客様の笑顔や製品が直接見えるなどのメリットは必ずあるため、そういう部分が見えるようにしていきたい。

> 大東市の奨学金支援制度についてまだまだ知られておらず、情報発信にはまだ課題があると思う。また高校の進路指導の先生と接する機会がある中で、学校などへの進路指導は得意とするが、企業への進路指導を苦手とする先生は多いように感じる。市や企業の情報発信を通じて教育機関へのアプローチが必要だと感じる。

> 先生によっては地元を全然回らない人もいる。今後は先生の考え方を変えるような取組が必要である。呉市では地元の中小企業がバスをチャーターし企業を紹介するような取組を行っている。大東市でも企業から教育機関に対してアプローチすることが重要である。

> 佐川急便では若い従業員をアピールしたことにより企業イメージを向上させている。大東市で中小企業の若い従業員をSNSで発信していくことでブランド化することができるのではないかな。例えば現場男子を紹介するような取組も面白いのではないかな。また商工会議所で新入社員の研修会を実施している。横のつながりもあり、大東市に若い世代が根付く良い取組である。大東市は町を挙げて若い人を支援する市であるという認識が広がれば若い人が増えるのではないかな。

> FactorISM の関係で名張市の企業を訪れた際、従業員が若いことに驚いた。社長に話を聞くと採用において学生の母親が安心して就職できると感じさせることに力を入れている。FactorISM においても単に工場を見せるだけではなく、子供が来ても楽しめ、また母親が安心して見ていられるような取組を行っていた。学生の母親が企業のファンになることで、若年層の採用がうまくいっている例のひとつである。SNSなどは有効なツールではあるが、FactorISMなどで企業と学生やその家族が直接顔を合わせることがより重要だと考える。上記のような取組は従業員にとっては休日出勤につながるが、若い人が入ることを希望する従業員が多く、自主的に取り組むことなど好循環が起こっている。また家賃補助にも取り組んでいるのも魅力の一つになっている。

> 当社も FactorISM を通じて会社の知名度を上げ、地域の人に知ってもらうことを目的にした。また従業員のモチベーション向上に一番効果があったと感じる。若手社員を中心に FactorISM を実施したことで、従業員の横のつながりを増やすこともできた。また従業員に会社のことを知ってもらうことも良い機会にもなった。八尾市では「みせるばやお」などを活用し情報発信を行っている。1 企業では発信しきれない情報も上記のようなプラットフォームを使うことで有効に情報発信を行うことができる。

> 東京の台東区では自治体を中心となり年に一度「モノマチ」というイベントを開催している。具体的には企業や学生のモノづくりを広めるイベントであり、例えば学生は自主製作の小物や服飾品を販売している。このイベントは街を活気づけており、起業しようとする学生のチャレンジの場にもなってい

る。現在、FactorISMは製造業が中心であるが、大東市中心で様々な業種を巻き込んだ取組も必要ではないか。また「モノマチ」ではロゴがあり、どの企業もそのロゴを使用することでこの取組が浸透している。

>その催し物に対して経営者が刺激を感じることが大切。会社情報の発信や企業経営など様々な部分に刺激を受けてほしい。その刺激により企業をより良いものにしていくことが大切である。

>常に催し物には仕掛け人がいる。オープンファクトリーも大正区が初開催をしてから、広まった経緯がある。上記のようにキーマンがいると施策は大きく進んでいく。またオープンファクトリーは社員の喜びにもつながり組織の活性化にもつながると考える。

>ファクトリズムは大東市では8社ほど開催されているが、「おーぷんふぁくとりーこんたくと」と別れている。

>中村部長意見

「おーぷんふぁくとりーこんたくと」は大東市内限定、FactorISMは広域的に行うことを目的に活動している。私が一昨年に参加した門真のFactorISMでは多くの従業員から会社方針などの説明を受けられたことに感銘を受けた。この活動は会社方針を従業員にも周知することにもつながっている。またその企業では一日だけ社員の家族向けにFactorISMを実施しており、従業員家族に向けて働く姿を見せることにつながっている。またその企業は口コミで人材を確保できており、人材不足にも陥っていない。FactorISMは万博を目指して活動をしているが、万博後も企業の魅力を伝えられるように活動していきたい。また「おーぷんふぁくとりーこんたくと」と「FactorISM」が協力して活動できるようにしていきたい。

>経営者支援としては質を上げることは重要である。経営とは多岐にわたる。売上増加や人材定着だけでなく様々な活動への支援について考えていきたい。

>経営には「術」と「道」があると考えている。経営する上での手法、例えばDXへの具体的方策を指す「術」と経営者の心構えを学ぶ「道」がある。情報提供をしやすいのは「術」であるが、会社が抱えている課題によって必要な「術」が異なるため、内容は多岐にわたる。そのため何を企業が求めているかを把握し、テーマを選定することも必要である。

>法改正や制度改正に関しての勉強会も必要だと考える。またインターネットで情報を見ることが出来るようにしていきたい。

>アンテナを立てていれば学びの場は多く存在する。しかし多くの経営者はアンテナすら立てていない状況にある。今後はそういった経営者にアンテナを立てさせるための学びも必要だと考える。

>経営者だけでなく、すべての人において教養が特に大事だと考える。大学教育では初年度にどのように汎用的な能力への教育を行うかが重要視されている。社会の中でも自分を成長させるためにどのような知識や能力が必要かを考えることも重要だと考えます。

>過去に商工会議所で経営理念について講義をした際、反響も良かった。その時に経営理念は改めて重要だと感じ、また経営理念が実現しそうな姿を描き、行動することが重要だと考えます。

>同友会に入ることによって学びの場を提供することはできる。今後も同友会への勧誘は継続して行っていきたい。

>リーマンショック時に経営理念の重要性を感じた。当社は2000年から経営理念や経営計画を立て、金融機関への発表も行っていた。しかしリーマンショック時に債務超過になった時期があり、銀行から実抜計画を求められ、新卒採用についても停止してほしいとの依頼があった。そんな中でも経営計画を達成するために行動し続けた結果、銀行が融資条件を変えてくれた過去がある。大東市にも経営理念や経営計画をしっかり立てている企業を増やしていきたい。

>教養への学びについては大東市に図書館が充実していると感じる。このような状況を活用して何かと取組はできないか。

>大東市の東部図書館では館長の意向によって企業情報が見る事が出来る。親子でこのような情報の触れる事が出来る場は必要である。

>大東市に限らず後継者不足は企業の大きな課題である。M&Aを視野に入れている企業もある中、理念を継承してくれる人にM&Aをするための手助けを行政が行える環境があれば良いと思う。行政は安心感があるため、相談がしやすいと感じる。

>最低賃金も上昇する中で廃業する企業は増えていく。物価が上昇しても価格転嫁を実施できない企業もあることが課題である。

>障害者雇用には課題もある。障害者雇用は最低賃金で行うが、最低賃金が増える中で社内最低賃金との差が小さくなっていく。その中、社内最低賃金で働いている人のモチベーションの低下にもつながってしまう。またベースアップを行う企業は多いが、ベースアップをしていると回答する企業の一部にも疑問を感じる。ベースアップとは賃金テーブルがあることを前提にしているが、それを作っていない企業も多く存在する。また賃金テーブルを理解していない経営者も存在する。こういう部分を含めて経営者の学びを行っていきたい。

>中小企業をテーマにした演劇の脚本を作成し毎年公演を行っている。また来年は起業をテーマに脚本を書こうと思っており、その取材を行う中、飲食店限定で「あきない虎の穴」という起業家向けの塾と

関わる機会があった。その際に起業家の熱意に驚いた。その塾では卒業生等が講師を行うこともあり、起業家コミュニティの場になっている。受講者は女性や早期退職者も多く、起業を行う上での心構えや実践的な学びの場にもなっている。このようなコミュニティを大東市で作っても良いのではないかな。

>大東市にも「morineki」でもそのような取組ができないか。学生が経営を学び、後継者になってもらえるような流れを作りたい。

>日々経営を行っている人の話は重要であり、起業家も情熱をもって話を聞いている。また卒業生が講師を作るためアットホームな雰囲気になっていることも良い効果を生み出している。

>大東市は地域を川で分断されていることにデメリットには感じている。また大東市在住の人は地元が好きだからこそ危機感を感じず、変えようと思えていない部分があると感じる。

>地域特性を分析し、その分析内容を活かした教育の学びについて今後は考えていきたいと考える。またその中で社会に出ていくときにどういう言葉の力が必要かも考えていきたい。

9. 次回開催について

予定日 12月4日(水) 15時～17時30分